

特 集

呼吸不全をきたしうるウイルス感染症

《巻頭言》

獨協医科大学埼玉医療センター 集中治療科 長谷川隆一

日常診療において感染症を考慮すべき病態はあまりに多く、中でも呼吸器感染症は最もコモンな疾患の1つである。一般的に呼吸器感染症のおよそ7～8割がウイルス性と考えられているが、これは外来診療をしているとよく理解できる。しかしインフルエンザなど特定の治療手段のあるものを除いてほとんどのウイルス感染症は対症療法のみで改善することが多いため、一般診療科にとってウイルス感染による呼吸不全のイメージは薄く、実際、気管挿管・人工呼吸管理に至るほどの呼吸不全をきたすものは限られている。しかしウイルスの種類や宿主の併存疾患、呼吸機能などによっては呼吸不全が重篤化し、通常の人工呼吸療法では管理困難となり、体外式膜型人工肺（extra-corporeal membrane oxygenation : ECMO）といった体外循環装置を必要とする場合もあり、2次医療機関での対応は困難となる。さらにウイルスによる呼吸器感染の場合、RSウイルスやインフルエンザを除いて一般に診断が困難であり、感染者との接触歴や流行地域への渡航、流行時期や患者の免疫能などの状況証拠から感染を推測して治療に当たることになる。また確定診断を得ても抗ウイルス薬などの根本的な治療が存在せず、人工呼吸管理を含めた対症療法のみを行う場合も多いといったように、ウイルスによる呼吸器感染はいくつかの問題を有している。

本特集では、まずRSウイルスとインフルエンザウイルスによる呼吸不全を取り上げ、その特徴と管理方法について詳述していただいた。さらにウイルス感染の新たな診断手法についても専門家にレビューをお願いした。

一方、慢性呼吸不全の患者にとってのウイルス感染症も臨床的には大きなインパクトを有している。つまり急性増悪による呼吸不全をきたして入院の機会を増加させQOL（quality of life : 生活の質）を低下させると同時に負の医療経済的効果を、さらに引き続いてしばしば細菌感染を併発し致死的になることもあるからである。そこで一般的な風邪症状をもたらすライノウイルスの影響を、慢性呼吸不全患者の視点で執筆していただいた。また、近年ステロイドや免疫抑制剤を投与される患者も増加しており、日和見感染としてのサイトメガロウイルスは以前よりARDSや多臓器障害をきたす病原体として注目されてきた。今回は改めてサイトメガロウイルスに関する最新の知見をまとめていただいた。

今回の特集により、ウイルス感染とその呼吸管理について会員が大いに興味をかきたてられることになれば企画者としては幸甚である。併せて本特集が臨床現場におけるウイルス感染への対応のワークフローを変えるきっかけになるものと期待している。

COIに関し、著者は2018年3月までJA茨城県厚生連による寄附講座を担当した。